

# ハーブと歌で病苦和らげる

病院やホスピス(緩和ケア病棟)、高齢者施設や病者の自宅を訪問し、ハーブと歌を用いて祈り、苦しむ人の身体的・精神的・霊的な苦痛の緩和を助ける「パストラル・ハーブ」の司牧活動を続ける日本在住の米国人宣教師、キャロル・サックさん(57/米国福音ルーテル教会)。サックさんが二〇〇二年に始めたこの働きは、病者の魂に寄り添い、「あなたは神に愛されている存在です」ということを伝える祈りの一つの方法でもある。

米 国 福 音 ル ー テ ル 教 会 宣 教 師  
キャロル・サックさん

うになったという。

「祈りを届けたい」

サックさんがパストラル・ハーブを始めたきっかけは、二女が7歳の時、神経性心疾患になったことだった。愛娘が病気がなった事実には押しつぶされそうになっていた時、サックさんを救ってくれたのは、友人の祈りだった。祈りの大切さを体験した彼女は、他の病者にも「希望を与えたい」と、病床で病者のために祈るボランティアを始め、その祈りを届ける具体的な方法として、心を癒やす音色のハーブ演奏を思いついた。

その後、宣教師である夫の全面協力を得て、二年間、米国モンタナ州のカトリック系の聖パトリック病院附属「ミュージック・サナトロジー(音楽死生学・音楽によるみ

とりケア学校)に通い、そこでハーブ演奏をはじめ、神学、音楽理論、医学、霊性について学んだ。ミュージック・サナトロジーは、カトリック信者のテレリス・シュローダー・シェーカーさんが一九九〇年代初頭に開拓、主にハーブと歌声で、相手の身体的・精神的・霊的苦痛の緩和を図ることが目的だ。十一世紀のフランス・クリュニシアにあったベネディクト会で、仲間の修道士が死にひんする時、その傍らで絶え間なくクレゴリオ聖歌を歌いつつ、みどっていたことに起源を置く。これは医療行為としての「音楽療法」とは違う分野だ。

現在、ミュージック・サナトロジーは、全世界に五十人ほど。日本で活躍するのはサックさん一人だけだ。彼女は、この学校での学びの中で、特に「祈り」の部分に焦点を当てて「パストラル・ハーブ」へと発展させていった。

現在、日本福音ルーテル社団(JELA)主催の「リラ・プレカリア(祈りのたて琴)」では、サックさんの協力を得て、パストラル・ハーブの第二期ボランティア養成講座(十八カ月)を東京で開始。第一期生の湊九実子さん(43)は、「パストラル・ハーブは、自己表現の手段ではありません。患者さんの状態を感じ取って音楽にする、まさに患者さんの音楽なのです」と話す。

サックさんは毎週、カトリック信者の山本雅基さんが立ち上げた在宅型ホスピス「きぼうのいえ」(東京)に通っている。希望者の病床で、ハーブと歌による緩和ケアを実践するためだ。

パストラル・ハーブは、病者や死にゆく人々、またさまざまな問題で悩み苦しむ人を対象に、必ず一対一で行う。まず病者の脈を取り、呼吸を数え、また看護師から睡眠や痛みなどの情報を得る。そして恐れや悲嘆の度合いなど、身体的・精神的・霊的状态を把握した上で、相手から決して目を離さず、相手の呼吸に合わせて、ハーブのリズム・緩急・強弱・音質を柔軟に変化させて、愛情深いケアの姿勢

で演奏していく。「レパトリー」は二十曲ほど、主にテゼの歌(詩編のような短いもの)やクレゴリオ聖歌、子守唄です。患者さんに会ってから得たインスピレーションで、五曲くらい選び、同じ曲を五、六分繰り返しますが、時には一曲だけを繰り返す場合もあります」とサックさんは話す。

約三十分の演奏で、病者は眠ってしまったり、呼吸が安定したり、痛みを忘れたりする。「きぼうのいえ」のある男性故人は、性格的に難しい人だったが、ハーブを聞き、号泣しながら「こんなに清らかな気持ちになったのは初めてです。もう怒るのはやめました」と言い、人が変わったように

なったという。サックさんは「私たちは、神の恵みと愛を提供する道具に過ぎません。人々の心に触れるのは、神様です。患者さんが神様に愛されていることを実感し、『このハーブの時間が大事だ』と思ってくれることが一番うれしいです」と語っていた。



病室に運び込めて、かつ音域の広いノンペダルハーブを弾くサックさん